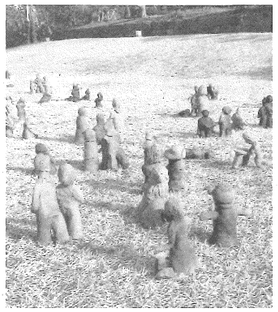
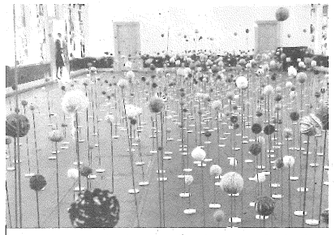
中国

作品づくり、リモートで完結

香川・善通寺で現代アート展



香川県の土でつくった人形も多く並んでいる（布下翔碁氏「香川の土に還る」）



毛糸の玉をよく見ると形や大きさが違う（五十嵐靖晃氏「Thread journey/糸の旅」）

素材づくりから作品に仕上げるところまでリモートで完結させた東京芸術大学の現代アート展が、香川県善通寺市の旧善通寺偕行社で開かれている。現地の立体的な画像をインターネット上のバーチャル展覧会でも発信している。新型コロナウイルス下の現代アートの制作・展示の可能性を広げる試みとなった。

「TURN on the EARTH～わたしはちきゅうのこだま～」は東京芸大と、善通寺展と同大と連携協定を結ぶ香川県が企画した。一般の人につくってもらった毛糸の玉など様々な素材を集めてひとつの大きなアートに仕立てており、同じようなものが並べてあるようで、じっくり見ると素材を通して携わった一人ひとりの個性が体感される。

善通寺の展示作品は毛糸の玉のほか、窓から撮った写真、古着の布きれなどで装飾したうちわ、土でつくった人形の4つ。2020年夏に東京芸大美術館で開かれた同名の展覧会のコンセプトを引き継いだが、素材も展示の仕方も善通寺展ならではにした。

素材は1月から2月上旬にかけて、作品ごとにアーティストと香川県内の会場をオンラインで結んだワークショップをそれぞれ2回開いて制作した。ほかに善通寺展のホームページに制作要領を示し、応募してもらう方式でも集めた。

素材は当初、アーティストが善通寺の会場で作品に仕上げる予定だったが、首都圏などに緊急事態宣言が発令されたため、展覧会を監修する東京芸大の日比野克彦・美術学部長がリモートに切り替えた。ビデオ会議システム「Zoom」でアーティストと会場を結び、香川大学の学生らが指示を受けながら素材を配置した。

画面越しのやりとりでは微妙な部分が伝わりにくいため、会場では自分の感性で判断する場面も多かったという。それがかえって制作過程や完成品の面白みを生んだり、学生らのアート体験につながったりした。

連携協定に基づく東京芸大と香川県の美術事業は、これまで同大のアーティストが香川を訪れて作品を制作し、県民は簡単な手伝いをする形だった。想定が狂いがちなコロナ下の開催で、期せずして最初から最後まで県民の手で作品をつくる展覧会になった。

アーティストが来なくても作品を仕上げた実績は、地方での現代アート展覧会の可能性を広げたといえそうだ。会期は3月7日まで。感染防止対策で制限があるものの入場無料。バーチャル展覧会はホームページから閲覧できる。

（深田武志）

東京芸大、ネット上で展覧会も

壁や屋根、重ね塗り不要

まつえペイントが新塗料

工期短縮や施工費軽減

塗料卸のまつえペイント（松江市）は壁や屋根の塗装を1回で済ませられる塗料を開発し、販売を始めた。通常は下塗り、中塗り、仕上げ塗装の3工程が必要なため、工期短縮や施工費の軽減が期待できる。塗装職人が不足するなか、工期に間に合わせようとして労働時間が長くなる傾向もある。塗装現場の働き方改革につながる商品としても売りこむ。

塗装は通常、最初に塗装面と塗料の接着剤としての役割を果たす下塗りをする。その上に中塗り、仕上げ塗装と続く。風雨や紫外線にさらされる塗料は経年劣化して徐々に薄くなる。「耐久性を確保するには厚みが重要」（小田貴志専務）なだけに、塗り重ねる必要がある。

同社は現場の職人から「1回で済む塗料ができないか」との相談を受け、2年ほど前から研究していた。特殊繊維や火山堆積物からつくられる天然素材を加え、接着性と厚みを備えた塗料「アミコート」を開発した。小田専務は「通常だと3回塗っても厚みは0・1ミリ程度なのに対し、アミコートは1回で約2倍の厚みを出せる」と説明する。

遮熱性や防カビ、紫外線カットといった機能も備える。夏の炎天下で施工後10年たった屋根に塗ったところ、天井裏の温度は7度以上低くなった。アイボリー、ライトブルー、グレー、ブラウンなど100色以上を用意。生産と販売は自社だけでなく協力会社にも依頼し、1カ月に数千缶を出荷できるようにする。関東や関西など幅広い地域で販売する。

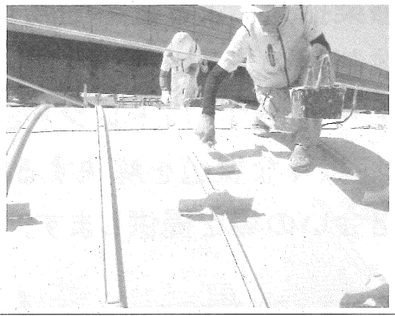
単位面積あたりの価格は高耐久塗料として注目される無機系塗料と同程度という。工賃は「3回塗らずに済むとはいえ1回できちんと仕上げるため、より丁寧で熟練した作業が必要となり、それほど変わらないのでは」（小田専務）。ただ、工期を短縮できるぶんだけ現場管理費用や交通経費などを減らせる。施工費全体では抑制できる。

建設業界では人手不足が深刻になっており、塗装も例外ではない。工期に間に合わせようと、職人が長時間労働を余儀なくされるケースもあるという。大規模工事の現場では県境を越えて他地域からの応援を受け入れていたものの、最近は新型コロナウイルスの感染拡大を背景に難しくなっている。

「アミコートを使えば作業効率が上がり、長時間労働を避けられる。職人が自分のための時間をより多く持てるようになればいい」と小田専務は話す。働き方改革が進むことで、職人の採用・育成に有利となる可能性がある。

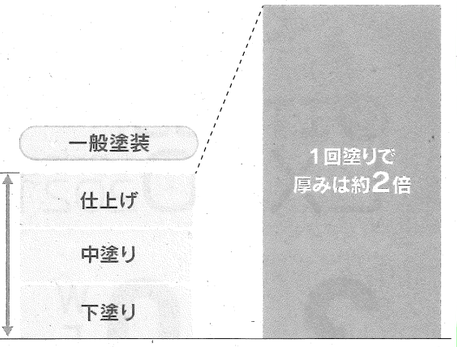
まつえペイントは1971年創業で、2021年3月期の売上高は約2億円を見込む。アミコートの販売で3年後に約4億円を目指す。同社は壁や屋根だけでなく、船舶や貯水タンクなどの塗装にも活用できるとみて用途開発に取り組む。

（鉄村和之）



小田専務（写真上）はアミコートを使えば職人の働き方改革にもつながると指摘する。職人から「1回で済む塗料ができないか」との相談を受けて開発した

「アミコート」の特徴



テレワーク拠点整備支援

鳥取県、事業者の経費補助

鳥取県はサテライトオフィスなどテレワーク拠点の整備を支援する。国の地方創生テレワーク交付金を活用。事業者が開設する経費として、県費も合わせて3000万円を上限に最大3分の2を補助する。新型コロナウイルスの感染拡大を背景にテレワークの導入が広がっている。県の担当者は「拠点を中心ににぎわいづくりにつなげたい」と話す。

拠点は「とっとりワークプレイス」と名付け、県と運営事業者が連携して利用企業の誘致活動もする。

県内3カ所の開設を目指し、4月12日まで事業者を公募する。事業者が提案するテーマやコンセプトなどをもとに、5月初旬をメドに補助対象を決める。

県は2024年度末の3カ所合計の目標値として、県外からの誘致企業を中心に1日あたりのべ35人程度が利用する規模に育てる。

「カープ」好成績で特典

広島銀・もみじ銀が定期預金

カープ預金の受け付け開始イベントであいさつする広島銀の池田晃治会長ら（3日、広島市）

広島銀行ともみじ銀行は、プロ野球の広島東洋カープの成績に応じて特典を追加する定期預金「カープ預金」の受け付けを始めた。預金を集めるきっかけにするほか、カープを通じて地元での消費活動を後押しする。

もみじ銀行の「カープV預金」は27回目。カープがセ・リーグで3位以内になった場合、抽選で1万～5万円の懸賞金が当たる。金利の上乗せだった従来の特典を見直した。抽選のため恩恵を受ける預金者は減るものの、特典の金額が大きく消費につながりやすいと判断した。預入期間は1年で金利は0・002%。2020年の預入総額は2542億円だった。

3位以内 金利上乗せ・抽選で懸賞金

広島銀の「カープを応援しよう！定期預金」は、リーグ3位以内の場合に金利を0・025～0・05%上乗せする。預入総額が700億円に達した時点で受け付けを終える。同預金は13回目となる。

2出張所に平日休業日

西中国信金、山口・岩国で

西中国信用金庫（山口県下関市）は3日、同県岩国市の通津出張所と錦町出張所に4月から平日の窓口休業日を設けると発表した。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で来店客が減っており、営業を効率化する。同金庫が平日休業の店舗を設けるのは初めて。

通津出張所は火曜日と木曜日を休業し、週3日の営業にする。錦町出張所は月、水、金曜日を休業し、週2日の営業にする。営業日の窓口の営業時間やATMコーナーの営業時間に変更はない。通津出張所の職員は平日の休業日に母店の南岩国支店で勤務する。錦町出張所の職員も同様に母店の岩国支店で働く。

かんきつ収穫量 愛媛が首位陥落

豪雨被害、18年産2位

愛媛県の2018年産のかんきつ収穫量は19万8933トンで全国2位だった。統計のある1974年産以降では初めて1位を和歌山県（19万9055トン）に譲った。18年の西日本豪雨により、温州ミカンの主要産地である宇和島市吉田町などで大きな被害が発生したことが響いた。「かんきつ王国」が首位から陥落した。

農林水産省の統計をもとに県が集計した。イヨカンやポンカンなど中晩柑（かん）類の収穫量は8万5433トンで1位を守った。

支局☎
鳥取 0857-22-2465
岡山 086-225-2071
広島 082-244-1155
山口 083-922-1167
松江 0852-21-2198